

水稲事はじめ—幌別川米づくり覚書

今でこそ日高はどこもかしこも牧場だらけだが、この風景が一般的になった昭和四十年代までは、幌別川も向別川も絵笛川も元浦川も、その流域はすべてうちつづく稲穂の波におおわれていた。その風景は、やはり“うまし国ぞ秋津嶋は”と歌われた時代から千三百年間、変わらぬ日本の農村風景に違いなかった。またこの風景は、筆者には入植した開拓農民の求めたひとつの大きな到達点だったように思える。

幌別川流域は、日高でも農民の集団移住のあった地域として、一、二位を争うほど古い。むろん、浦河では一番早く鋤の入った土地である。しかも政府きもいりの移民団として、何かと注目される立場にあったことから、比較的文献にも残りやすい地域だった。それらの文献の中から、古い時代の米づくりに言及したものに「天草海外発展史（上）」があり、その中で天草移民杵臼の本巢甚三郎が、秋田産の種籾を導入して水稲の試作を行うが失敗したとある。明治七年のことである。

また明治二十七年十一月、熊本県農民の北海道移住可能性調査に來道した松尾万喜なる人物が、「九州日々新聞」に“肥後人北海道移住の魁（さきがけ）”と題して寄稿した一文中に、明治八年のこととして

＜前略＞惣代本巢甚三郎非常に奮勵して一同に諭し、自ら水田を試み好結果を得て移民を勵まし
云々

とあって、天草移民が入植後三年目にして水稲試作に着手していたことが知られる。だがこれらが成功しなかったことは、明治十三年六月三日付けの「函館新聞」“日高浦川郡近況”と題した記事に、西舎杵臼塘沸（幌別旧名）三カ村にて水田を開き稲を試植せんと奮發し居れりとあることから判り、さらに「北海道蝗害調査報告」中“明治十三年各地景況”の項に九月三日付け浦河郡役所報として
西舎杵臼ノ両村ハ八月三十一日以來蟲稍々減少シ、本月一日ニ至リ杵臼村奥ノ耕地ハ全ク其跡ヲ絶ツ。本年試作ノ水田及畑ハ慘害ナシ。＜中略＞西舎村ハ＜中略＞試作ノ水田ハ数日ノ旱天加フルニ蟲害ヲ受ケ、実ニ傷マシキ状態ナリと記されている。明治十三年幌別川流域の西舎、杵臼、幌別三村が、鋭意水田試作に取り組んでいたことが明らかになったばかりか、イナゴの大襲来に脅かされていたことが知られる。またこの時期の米づくりに言及した「杵臼百年想」では、十五年頃吉田松市などが米の試作を行っていたと記している。

一方西舎地区に関しては「浦河町史」（以下町史と略）が尾田忠兵衛（忠平）の試作に触れ、明治八年忠兵衛は幌別川を利用して灌漑（かんがい）をはかり、西幌別の今の幌別牧場付近で試作を始めたが、水害のため失敗したとある。前記函館新聞のいう西舎の試作の試作者と同一人ではないかと考えられるが、西舎の古老たちの記憶にはない。この地区の米づくりは、福井県から入植した松田七兵衛、宝太郎兄弟などの手によって、三十代後半から始められたとされているだけである。場所は富田牧場の採草地となっているあたり。

また、函館新聞のいう塘沸、今の幌別地区についてははっきりしたことは不明。国道周辺が浦河村の堺家の借受地になっていたことも関係があるのかも知れない。又、ピスカリ館から浜にかけては、ほとんどの土地が葦の生えた泥炭地だったことから、入植が遅れた地域でもある。

杵臼の吉田文夫がかつて聞いた話として、現吉田牧場の山近くの低地が杵臼で一番古い水田で、大道仙八が試作した場所だとしている。大道仙八の没年が明治十二年であるの考えると、おそらく本巢甚三郎などととも、明治十年以前に試作した場所であるに違いない。とすれば、浦河の稲作地帯の水田としては、由来の明らかな一番古い水田ということになるだろう。またこの二人のほかにも吉田兼次郎などを加えれば、いわば杵臼の水稲試作第一世代ともいべき人物群になる。この試みはどうかやが結実にはいたらなかったようだが、さらにこの試みは第二世代にあたる吉田松市、本巢万太郎、本巢熊三郎、大道弥十など明治三十年代の人びとに引き継がれていった。

明治四十二年に発行された「日高案内」(以下案内と略)に<前略>就中(なかんづく)浦河町村農会は三十三年より大小豆の改良を励行し、三十七年以降、模範桑園を設け桑苗を配布して、養蠶の奨励を為し、其他の村農会にありては、鋭意水田開発を奨励、種苗の分配を実行するとともに、農談会農事習會等を開設して熾(さか)んに斯(し)業の振興を期しつつありと、三十年代の浦河の農業事情を記している。この頃には品種、技術ともに実作にたえるものが確立されていたものであろう。日高管内の水田は明治三十年頃で三六町(殖民状況報文)、同三十五年八〇町(案内)、同四十一年二二五町(案内)と、飛躍的に拡大している。ちなみに四十一年の収量が四、二一三石で、平均すれば反収は約二石弱(粃換算八俵、実収四俵)になる。

明治四十年六月十五日、杵臼開村記念式典が行われ、このときに初めて杵臼競馬が行われたが、この周囲半マイルの競馬場は本巢万太郎が造ったもので、その内側が水田になっていた。面積は約一町で本巢ではすでに実作に入っていたことになる。

他地域の水稲試作について少し述べておきたい。

元浦川流域の水田の試作は町史によれば明治十三年に瑞穂(みずほ)に入植した北股莊助の手で行われ、十五年頃には成功したとしている。しかし塩出宇吉の手稿「清風和流」によれば、莊助は十三年に來道したが、瑞穂に入ったのは十八年五月としている。試作地は北股牧場の少し下手の沢筋で、この沢水が温かいのに着目した莊助が、これをせきとめ溜池とし、この水を引いてわずか数坪から一反までの田を造ったものだという。

また赤心社も、荻伏に入植した翌年の十六年には、早くも水稲の試作に取り組んでいる。同社初期の記録「農業概況」(塩出宇吉所蔵)“稲”の項の記述に

四月廿三日水二漬ケ炉辺ニオク、五月十八日粒植トス、六月六日ヨリ十日迄、水ヲ放チテ乾湿ヲ取ル、八月十四日初穂ヲ現ス。十月四日共進會出品ニ少シク苧ル<余白>不実

とあり、失敗の様子が判る。試作田は二反五畝、以後二十年まで試作を続けるが、思わしい結果が得られなかったようで中止。「神威之流」(塩出宇吉手稿)によればこれを再開するのは三十六年、通称“森田の沢”で谷間の湧水を利用し、玄米で反収平均六斗強を得たという。

絵笛地区の試作は江谷(ごうや)弘吉、中江亀三によって行われたようで、田中岩蔵によれば、大絵笛と小絵笛の分岐より少し奥の地。岩蔵が父由平と水稲に取り組んだのが、明治四十五年だったから、岩蔵はそれから換算して三十五年頃には試作にかかっていたものとしている。町史では二十七年としている。

向別地区の状況は、明治三十八年に著わされた「北海立志編」堺清兵衛の項に一部記され、明治十七年清兵衛はピラトカリに水田一町を開いたとしている。当時堺家の借受地が目名太(メナブト)と本沢の分岐より奥なので、この水田というのは、分岐点から本沢沿いの少し奥だと考えられる。谷

田太一によれば、このあたりから元の向別小学校あたりまでが向別の稲作適地だったことから、それが妥当な所だとしている。ただ米づくりについては、明治十年代に入植した向別の草分け、久保田春吉、小山豊松が最初だったろうとしている。

[文責 高田]

【話者】

松本 忠雄	浦河町西舎	明治四十二年生まれ
吉田 文夫	浦河町杵臼	明治三十九年生まれ
谷田 太一	浦河町向別	大正二年生まれ
塩出 宇吉	浦河町荻伏	明治三十六年生まれ
田中 岩蔵	浦河町絵笛	明治二十九年生まれ
北股 春信	浦河町瑞穂	大正十二年生まれ
本巢 弘	様似町西様似	明治四十三年生まれ
西村 アイ	浦河町堺町西	明治四十五年生まれ

【参考】

北海道殖民状況報文日高国 明治三十三年 北海道庁
天草海外発展史(上) 北野典夫著 昭和六十年 葦書房
日高案内 倉田嘉橘著 明治四十二年
北海立志編増補改正版 明治三十八年 北海道図書出版合資会社
北海道蝗害調査報告 明治十五年 開拓使
函館新聞 明治十三年六月三日号
九州日々新聞 明治二十七年十一月二十二日号